30年後の道民が見ている

二年ほど前、故大平正芳元首相が、ささやかなブームとなったことがあった。

没後三〇年、生誕一〇〇年ということもあり、大平政治を再検証する研究書や回顧本の出版が相次いだ。辻井喬がその生涯を「茜色の空」という小説にまとめた異色の組み合わせも話題となった。

その内容は、いずれもおおむね好意的なものだった。

「政界屈指の知性派」「哲学を持つ数少ない政治家」と評価され、「田園都市構想など二一世紀を見据えた提言を多数発表した」との賛辞もあった。「鈍牛」「アーウー」などマイナスイメージだったはずのあだ名も、親しみやすさの象徴としてとらえ直された。野田佳彦首相も、自らが描く宰相の理想像として掲げている。

だが、大平氏の女婿で、首相秘書官を務めた森田一元衆院議員は自著のインタビューで「そもそも大平政治というのは非常に評判が悪かった。選挙で亡くなったから同情を受け、今でこそみんな大平政治と言うけど、あの時はクソミソだった」（「心の一燈」第一法規）と振り返る。

首相在任当時は、自民党の派閥による「四〇日抗争」などの権力闘争が続き、世論は「コップの中の争い」に、がっぷり四つに組む大平氏を冷ややかに見ていた。政治家の「小粒さ」や「軽さ」が懸念される最近になって初めて、対照的な存在として、当時はあまり注目されなかった大平氏の重厚な知性や哲学に光が当たったのだろう。時の熟成が、一歩引いた人物評を可能にしたのかもしれない。

政治家の評価というのは、最終的には歴史に委ねるしかないのだろうか。在任中に最悪の評判だった政治家が、時を経て、意外にも別の角度から再評価されることもある。だからこそ為政者たちは世論の批判を受けた時、「いつかは国民も『あの判断は正しかった』と分かってくれるはずだ」と自らを励ますのだという。

その流れで言えば、まだ、時の審判を受けるには早すぎるが、最近、赤れんが周辺でささやかれる堀達也前知事への回顧話も興味深い。

一九九五年から二期八年間の堀道政は、道庁不正経理や農業土木談合などの不祥事にまみれ、北海道拓殖銀行の破綻や全国初のＢＳＥ発生など歴史的な事件が相次いだ。にもかかわらず、堀氏本人は恥ずかしがり屋でパフォーマンスを嫌い、先頭に立って危機に立ち向かうよりも、水面下の調整を得意とした。

道民からすれば、一体何を考えている人なのか、分かりにくいことこの上ない。支持率は、二〇％台から高くても三〇％台後半。地味な印象だけを残し、三期目の出馬は見送らざるを得なかった。

それでも「あのころの道庁には活気があった」と、郷愁たっぷりに振り返る声がある。「この逆風を何とかしなければならない」という危機感から、公共事業を見直す「時のアセス」や、安心・安全を目指した牛の全頭検査の検討など、「全国初」と冠がつく施策が次々に誕生した。当時アピール度が高かった「改革派知事」たちの陰に隠れ、全国的に注目されることは少なかったが、堀道政は決して悪くなかった―。そんなプラス評価の見方が、静かだが、さざ波のように続いている。

これも「昔は良かった」式の話の一環にすぎないと言えば、それまでだ。いずれにせよ、堀道政は、まだ生々しすぎて、再評価の対象にはなり得ない。ただ、こうした声が出始めるのは、現体制への不満の裏返しであることが少なくない。

高橋はるみ知事は、大きな失点がないとされ、支持率も一貫して高い。だが、将来、あらためて顧みられるだけの哲学があるか。全国に先駆けた斬新な政策を生み出せているか。道職員は意気に感じて仕事に打ち込んでいるだろうか―。

政治家にとって本当に大切なのは、今の世をうまく切り抜けることではなく、歴史の評価に耐えられる仕事ができるかどうかだ。三〇年後の道民は、高橋道政をどう振り返るのだろうか。

＜由＞